

tab

No.
16

2
0
0
9
/
05
/
15

後藤美和子 / 石川和広 / 野村龍
近藤弘文 / 高塚謙太郎 / 福島敦子
秋川久紫 / タケイリエ / 倉田良成

楯 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

- 後藤美和子：越境／01
野村龍：星／03
石川和広：あくことなく／05
近藤弘文：が折れた腕や5／07
高塚謙太郎：夜明けが来る／08
秋川久紫：追憶Ⅷ（追放と結界）・奔水／10
福島敦子：椿／13
倉田良成：はなぞむかしの——私の小倉百首から／15

文

- タケイリエ：どこか遠い空に繋がる／17
倉田良成：悪人正機説について（2）／19

あとがき集／23

画：和田彰

tab 第16号／2009年5月15日（毎奇数月発行）

編集発行人／倉田良成

〒230-0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ 201

Eメール／kaitei511@k3.dion.ne.jp



後藤美和子

越境

使いが来る、足手まとい

呼ばれている夜、泣いて泣いて川のそば

いくつかの舟出の先に

登っていった、明かりのうしろで

だんまり黙って

かつて宿場だったもの、固めて流して川底に積もる

好きだ、好きだ、その横顔を愛した

私が押しやったもの

蛙の鳴き声、脱いだ後の肌の

大いなる入れ墨の幾重にも連なる鮮やかさ、その艶やかさの

打った弾んだ、この長き矛先に

立ち並ぶ、エラ持つ影々

私の髪が焼けていく

諸手を挙げて立ち並べ

シヤクヤクの花が咲く、愛想をつかした者どもの影

立ち並べ、幾千の森の木よ

潜み凍えた、わが愛人の小声は

いよいよ激怒していく

夜の道を走り回った、手をつなぎ

越えていった、陸という陸を

紙なしに、紙なしに

選ぶことなき色と色の中に
泳ぎ渡った、手をいつか放していた
手を放していた

(皆既蝕四十七)

野村龍

星

芥子達の温かな軌跡から
新しい声が現われる

百合は 蝙蝠の血を 光る指に含ませ
最後の香りを綴る

岸辺でまどろむ乾いた聖書を
蝶をまとった白い少女が切り裂くとき

風が零した遠い瞳は
炎の波間で (猫の睡りのように) 溶けていく

塔の頂きで
天使の数式を解いたら
髑髏がひとつ 転がり落ちた

滝を囲んで
金色の猿達が翼を賛美する

苔むした廃寺の奥に
(結晶した木乃伊の輝きに護られた)
毒蛇の 三つの歌を象った指輪があるという

死んだ泉達が集うこの砂丘のどこかで
悲しい電話が

石川和広

あくことなく

その働き謎めいている

でも謎なんか全然ないみたい

隠すというといやらしい

隠されているんじゃない

恥じらっている 後ろめたい気持ちなのかそこにあることが

誰かと卓球をした後の女の子の頬を

僕の場合はキャッチする

頬が赤らんでいる

桃色よりすこし赤い

その赤みを僕の目は捉える

気持ち良さそうな気分の子の頬を感じることが出来た

その子はずいぶん長く病気なのに（それは僕も同じだ）

今ようよう血が通ってきているのはなぜか

光が明るく

額に迫ってくるように思えてくるのは外の天気がいいからか

どこから光があふれてくるというのか

くすぐったさ、やわらかさに満たされる

たぶん僕は元気になってきている

無限に複雑で、複数の光や流れが

なぜかたったひとつのこの僕であると

日陰や夜や

トンネルや、しげみや見えないということ見せられない

ということ見せたくないそもそもないそもそもないと思いたい
捨てたい捨てるにはおしい

傷つけないその穴にはふさぐものがない

それは死んだ人を無造作に放り込むとおなじ穴

僕の背後にそれら一切の暗やみが明らかにあるのに

今日も光の中でたった一つのまとまりとして

こんにちはいって

あくことなく話しかけ続ける

近藤弘文

が折れた腕や5

の静かな煉獄模様に染め抜かれた
喪の肋骨を

と祈ったぼくは

擲つ言語の化身になりたくてそこ

でじつとしてゐる声が

撃ち込まれる閃きにきらきら

光の消えた道化たちの檻樓

の瞳憑いたよこの世の逆鱗がわたしの青空

に死ねない譜を携えて野晒し

どこだ、どこまでも闇の粘土で

それはきみたちがひろってきたからすうりの原石なんだよ

星辰の序破急を身ごもって

が折れた腕や

ヒアノ、ヒアノときみはわめいて

幼き光芒がいま分裂する

が現像された日没をカテドラルへと

高塚謙太郎

K氏、耽る。

3 夜明けが来る

もちろん未知の女が薄明までのテラスから見ているものは死より確実なものではないとして、いったい何が来るのか。

後ろから。前から。互いに向き合って互いから。

ついに逃れることなく雑念を未練を、リビングの、廊下の、階段の、灯下に居座らせていたのが、いつの間待っていたような姿でこうしている。額の髪がうるさいと、いつの気障りだったか、躰は静まり（楯円に波状する暗がり鈍く匂う髪飾りの薔薇派のわたし）。躰を触ってほしい（捲り上げた袖から骨張った腕を絡め欄干上に到来を待つわたし）。

「夜の空気が甘い。春の匂い」

雨の残していった冷気にたゆたい、胎内のように丸まって触れたこの手の、張りつめた温度の放射上に欠片があれば、熱は無音になる（唇に愛い衣擦れを手慰む影の最中の前に向かう睫から引き返すわたし）。無音が未然の温度を均し、平熱の喉を指していた昼時の交わされたほのめきと同等に並ぶ（欄干の模様のように絡ませる腕の耳を覆う伸びる頬に触れる小指の髪へ埋もれてゆく夜明けがわたし）。

倫落の果ての息が見える見えない（長くひかれた眉の下の薄い部分に混じる震える影こそがわたし）。

どこから。いつから。ずっと。傍まで及べばいいのか。

もうすぐ来る沈黙の先の沈黙、ささやきを耐える、その唇から知れ。

「花盛りの名刺で、ここにせず」

追憶Ⅷ（追復と結界）

池袋の百貨店の裏手の小さな配送所。狭い通路脇に賑々しく貼られた化粧品社の販チラシの数々。販売力と美貌を根拠として当然のように別格扱いされる資生堂謹製とエレベーターガールたち。虚無を積み込む幌付き台車の力点・作用点を覚え、今や急カーブも難なく曲がれるようになった青年。雪まみれのピストン車への積込みが進められる中、前日に眼にしたはずの荒くれ男の失職に気付く。虚無を粗雑に扱い、ヒエラルキーの相似形を少しばかり歪めた代償なのだろう。はなむけに祈りを込めて撒かれた薄い包装紙の欠片たち。青年はそこで瑠璃色の制服に身を包んだ一人の娘に心を奪われる。伏し目がちに往き過ぎるその華奢な肩先と短めの黒髪。即興で編んだペイズリー柄の追復曲はカネボウのブースに向かうためだけのもの。店内へと直結する狭い通路は歳末ならではの渋滞を繰り返し、青年はしばしばラピスラズリの肩先を見失ってしまう。戦略と幻想が不要になるまで塗られ続ける命のリップスティック。あるいは挑発を装ったマスカラの陰影が織り成す怯懦の円舞曲。やがて青年は闇夜に瑠璃を纏った白い首筋を探し求め、月の閃光を切り裂いて娘に贈ることを思い立つ。寒空の下、ピストン車の発着所の眼の前に佇む一軒の調剤薬局。その店先を時折訪れる化粧品ブースの女たちが抱える煩悶の数々を未だ青年は知らない。程なくして瑠璃色の娘は何処かに嫁いでゆき、幾つかの単純な儀式を経ていつしか莫連へと変貌を遂げる。

揺るぎ無き明快な終章——磁場の昏迷に畏怖して急流に立ち、青年は振り向きざまに任意の同僚に向けて語りかける。幾多の虚無との戯れを棄て赤いカラスになりたい。群れの中にたった一羽だけ混じった結界をついばむ羽根の赤いカラスに。

奔水

奔水を

着て

失った

片腕で

莫連を抱きに行く

かつて

朱色の

シヨールを

釘で十字に

引き裂き

地べたに敷いて

その人とは

寛永寺の結界辺りで

幾度となく交わったらしい

陽炎の立つ

初夏に

きつく

舌を吸われ

困繞地を過ぎるようにして

当然の法理を

翳す

その人に

耳を噛まれ

さらに

唐突に膝頭を掴まれた

奔水を

脱ぎ

取り戻した

片腕で

莫連に会いに行く

折悪く

叶わなかった

唇の弾力を

確かめるため

雷雨の夜に

ひっそりと

事切れる

その白い

背中に突き立てられた

陰惨な刃を静かに引き抜くため

福島敦子

椿

もう嫌やから

どこか遠いところへ行きたい！

車に乗って走り出す

大きな道路を南下し

くねくね曲がる細い山道に入ったとき もう引き返せない

わたしは引き返せない道をのぼっているのだと気づいた

横は崖

ただ前を見て進むだけ

いっそのこと岬から父を捨ててしまえればいいのに！

わたし自身も思いつきり捨ててしまえればいいのに！

わああああああ わああああああああああああ

叫んで

アクセルを踏んでのぼりきると

岬の果ては椿の園だった

見渡す限り椿が咲いていた

足元にも咲きこぼれていた

椿はええな うらやましいわ

綺麗なまま 咲きながら死んで

花首 ぼっとり往生して

こんなふう逝かせてあげてください あやかれますように

もう父の症状が進みませんようにと
椿の花をお守り代わりに拾った

見渡す湾内には早春のひかりが降り注いでいた
ひかりだけを眼の中に残した

「皆さん 心配されますが必ず帰れます

道は細いですが大丈夫です」

お店の人に聞いて

車に乗って またエンジンをかける

道は細いですが大丈夫です

大丈夫です

自分に向かってつぶやく

ゆっくりと山道をくだっていく

助手席には椿の花が座っている

はなぞむかしの

はつせにまうづることに、やどりける人の家に、ひさしくやどらで、
程へて後にいたれりければ、かの家のあるじ、かくさだかになんや
どりはあると、いひいだして侍りければ、そこにたてりける梅の花
ををりてよめる。

人はいさこころもしらず故郷ふるさとははなぞむかしのかに匂ひける

紀貫之

また夏がやって来た。海べりのこの古いマンションに妻と
二人、暮らしてどれくらいになるのか。あらためて考えると
茫洋とした思いにとられる。時は積もるのでなく、再帰す
るものだということが、ますますたしかな感覚となる。青い
空、暴力のような太陽の輝き、それが去年とどう違っている
のか、今年のいま、記録された数字のほかによすがとなるも
のは何もない。こうして同じ時のなかで、私という空蟬だけ
が知らぬ間に燃焼し、熟し、やがて壊壊するのだ。それまでの
この、青い空、暴力のような太陽の輝き。日が中天を過ぎて
から、いつものようにマンションのある丘を下り、町に出る。
小さな魚市場は朝の糶せりをすでに終え、水を打ってひっそりと
した影のなかにある。磯臭いにおいは港の南にあるヨットハ
ーバーのほうからやって来るのだ。できるだけ町並みの影に
沿って歩きながら、ときおりタオルで首筋のあたりをぬぐう。
それから小さな食堂のがたぴしいう扉を開けて、食事をする
のは判で押したような毎日の習慣だ。食事といってもラーメ
ン程度のものだが。昼の霧笛が聞こえてくる。外に出ると、
たてものの間から垣間見える沖が、白いやいばのようにきら
めいている。何もかもが眩しい。これが、老年ということな

のか。布製の買い物袋を持ってスーパーマーケットに入る。夕食の材料を求めるためだ。むかしと違って、夕食に肉や魚の占める割合が少なくなっている。茄子や隠元やトマトを布袋に入れ、かついで港町をひと回りする。港の外れには断崖がひかえていて、その上に長大な枝がうねり絡まるタブノキの暗い森がある。そこには小さな神社があつて、いま祭礼の真つ最中である。普段、その場所に土地の人間はあまり近づかない。断崖に沿って小径があり、そこを辿るのがいつもの散歩の順路なので、またタオルで汗を拭きながら小径を行く。あたりは灌木と夏草が猛烈な精気を放っている。桑の木の群生があり、その葉陰に、金と緑の鎧を着けたカミキリムシが長い触角を動かし、いかつい口も盛んに動かして何かを咀嚼している。桑の木の幹には静かに蟻が這い上がり、付近の小さな空中を、アシナガバチが羽を唸らせて遊弋している。そのとき気づいたのだ。私は絶対の寂滅の視線でこれらを見ていると。これらの光景は、同時に私の死後の光景であろう。ふと、明るいものに呼ばれている気がした。明るさは陸の側でなく、海から到来する感覚だと判った。ふいこ、彼方、という栄耀に見舞われている自分を感じ、いまタブノキ林のやしろで盛る祭礼が放つ光に、それと同じものがあることに気づいてしまった。死ではない。しかし生でもない光。このなつかしさを、どう言えばよいのか。

どこか遠い空に繋がる

なまあたたかい夜が明けるとき、標高三百メートルの高原の町は霧にすっぽり、包まれる。先が見えない不安に、離れた街へと仕事に向かう車はライトをつけて、ゆるゆると山を下りてゆく。色あざやかにびかびかする信号も対向車の列もないこの町の時計は、さらに速度をゆるめ、ゆつくりと朝を迎える。

町の隅にあるちいさな工業団地は、ひっそりとして誰かの置き土産のようだ。あたらしい雇用がないので、子どもたちは高校卒業後、いつせいに町を出る。彼らは大阪や東京に向かい、町には空洞が広がってゆく。荒れた山を背にして、蕨茸き家が静かに死んでゆくなか、ふえてゆく高齢者たちは田畑を慈しむように農業を続ける。法蓮草、白菜、キャベツ、大根、牛蒡、大豆、黒豆、蕎麦、米。炭を焼く人もいるし、牛や豚を飼う人もいる。彼らは九十を過ぎても畝を放さないで、限界集落のなかに青々とした、すこやかな田畑を見ることが出来る。昔は葉たばこや養蚕が盛んだった。

子どものころ、葉たばこの乾燥場で寝起きをしたことがある。藁が混ざった土壁のにおいを嗅ぎ、夜の闇に耳をすますと山を駆けめぐる甲高い声が聞こえた。短い悲鳴をあげる山。濃紺の夜空には天の川があり、けものたちの声は渡るように移動する。

この町で生まれた私の息子は、四歳で備中神楽を習いはじめた。この伝統芸能は国指定重要無形民俗文化財である。神楽太夫によって次世代への伝承が努力されているが、多くの子どもはニンテンドーに夢中。幼稚園や小学校に通う子どもたちもずいぶん減った。何人かの母親たちは中国語を話し、賃金の安い工場やスーパーなど、近隣で積極的に働いている。シゴトナイネ、と言いながらも選り好

みはしない。そんな彼女たちは、同居の舅姑とも上手くやっっているようだ。

町にあるのは、廃墟のにおいがする工場、農協とその系列のガソリンスタンドとスーパー、産直市場、幼稚園、小学校、中学校、郵便局。いずれも、必要最低限である。コンビニエンスストアなどのようなものは、ない。

子どもたちは見知らぬ人にあいさつをすることが出来る。あいさつすることが、あたりまえだと思っっている彼らは年中、日焼けしている。そしてほどなく成長し、町を出てゆく。町には年をとりすぎた大人だけが残される。冬を迎えると猟師たちが山に入ってゆく。キジ、ウサギ、シカ、タヌキ、キツネ、テン。

けれど猿には困ると言う。猿を撃つことはできないと言う。猿は集団でやって来て畑を壊し滅状態にする。町の特産品はピオーネという糖度の非常に高い葡萄だが、これを山の動物が狙ってやってくる。イノシシなどは、後ろあし二本で立ってがつがつ食う。煮炊きの燃料が石油になり、山は手入れされず荒れてしまった。イノシシは増え、畏をしかけていると、十数匹も入る（最近の彼らは賢く、入らないことも多いが）。それを猟師が鉄砲で撃つ。解体ができる人間が呼ばれ、半日がかりで肉をさばく。イノシシは若いものが美味で、二十キロ以下のこどもは食えないので畑に穴を掘って、埋める。人々は土地と山（共同体）から逃れられない。幼い頃から荒神さまを祀り、先祖を祀ってきたから、そろそろ我々も墓に入ろうか、という頃なのに息子たちは街から戻ってこない。それでも彼らはなお、畑に種を蒔き続ける。

町には、美術館へ行く習慣も哲学の本を読む機会もない。詩をつくるより田を作り続けることができるかどうかの問題で、作れば作

上げることに、私はやぶさかではない。

るほど赤字になる米を食べながら年をとって
いく。高度成長期、都市へ向かった次男三男
の生活の豊かさは眩しい。田舎を必要以上に
卑下する人たちは、大都市で遭遇する不幸を
想像できない。職を失ったら住む場所を失い、
住民票を失い、人生も失うというシナリオが
想像できない。

東京のビル群はテレビの中の景色で、あの
大パノラマの世界で何が起きているのか知ら
ないし知ってどうすることもできないし、山
に暮らす少数民族である私たちの声が届くこ
ともないだろう。逆に、都市でひしめく声が
私たち山の者に届いたとしても「切実」の意
味を持参し、迫ってくることもない。

それでも、このひろい世界のさまざまは、
繋がりにあっている。起きているすべての問題
の根をお互い共有している。環境問題も、経
済危機も。その当たり前さと不思議さを感じ
ながら、とにもかくにも、ひっそりと詩を書
き続けることで、どこか遠い空に繋がること
ができています。

「詩を書く」時間は、山山山、に囲まれた
生活を一転、有機的なものにする。そう申し

悪人正機説について 2

このおもに今昔物語集卷三第二十七によるところの説話は、概ね観経から採られているらしい。教行信証信巻本文に出現する物語は、それに併せて、大経から採られた、父王殺し（観経では恐らく母后獄死もふくむ）の、時間的にはあとのことがやや詳しく述べられている。逆罪を為した後、阿闍世王の身に「悔熱」が生じ、からだに瘡ができて臭気を放つことはなほだしく、その周りに近づけないほどになる。つまり身を破るまでの悔悟の念が発したわけだ。いろいろな大臣がその身に罪のないことを説き、それぞれに信ずるところの尊者を王に紹介し、彼らのもとに行くことを勧める。その最後に耆婆が進み出て、王の罪の深さ、恐ろしさを説き、仏陀のもとにただちに参じるよう勧める。このとき、「色像を現せずしてたゞこゑのみ」の亡王が、たぶん阿闍世王にだけ現れる。父王は阿闍世に、耆婆の言うところに従え、と告げるのである。阿闍世はおそろしさに悶絶して地に倒れる。それから以下の論でいくつか触れるであろう釈迦の説法があり、「われいま仏をみたまつる」という阿闍世王の発心があつて大団円となる。教行信証信巻にはもうひとつ阿闍世王の説話に酷似した、父を殺した善見太子の説話も並行して置かれているのだが、太子の出生にまつわるその神話的な内容の玄妙さは別にして、今は深く立ち入らない。

教行信証で最重要視されている悪とは、五逆と誹謗正法であることはすでに述べた。五逆とは、故意に父を殺すこと、母を殺すこと、悟りを得た修行者を殺すこと、仏身を傷つけること、教団を乱すことの五つである。注意して見ると、阿闍世王が犯した罪は、教行信証内に引かれてある観経、大経を通じて、殺父と間接的な殺母の二つだが、観経・大経の

両経全体を見渡して、いまひとつ、かならずしも彼一人のわざではないにせよ、逆罪が犯されていることに気づく。父王・頻婆娑羅はむかし「ひとりの仙の五通具足せる」を殺害しているのだ。あるいは逆に、阿闍世王が殺した父王は初果の聖者であつた、とも。古人でも仏教徒でもないわれわれにも、これら物語の中で犯されている三つの罪の恐ろしさや深さはよく分かる気がする。対して、あとの二つ、出仏身血と破和合僧については、腹の底からの恐怖や痛みは湧いてこない。これらは教行信証における阿闍世王の物語にとつて、いわば物語外的な因子として、誹謗正法の問題に接続してゆくものようである。

結論から言ってしまうと、仏の正法を誹謗することは五逆より重いということなのである。このことは倫理的である以前に論理的な帰結として教行信証の中にあらわれている。

「汝たゞ五逆罪の重なること（ちゅう、）をしりて、しかも五逆罪の正法なきより生ずることをしらず。このゆへに誹謗正法のひとはそのつみ最重なり」（岩波文庫版233頁）。また、「このひと」は仏土に済度されることはありえない。なぜならば「この愚痴のひとすでに誹謗を生ず。いつくんぞ仏土を願生する理あらんや」（同232頁）、ということだからだ。注意しなければならぬのは、「愚痴のひと」が仏土に生じ得ないのは因果応報による仕打ちというよりは、仏土を誇るものが、その誇られた同じ仏土を願う理屈が成り立たないと言っている点だ。いわば理の勝つた話だが、親鸞はそこからさらに論じ論じて（つまり引用に引用を重ねて）、ついに五逆にまさる誹謗正法さえ撰取され仏土に済度されるものである、という結論に至る。

経緯はこのようなのだが、たぶん教団や教

義のようなものにとつて深重じんじゆうの罪とされる誘
正法より、われわれ門外世俗の人間にとつて
は、直接に阿闍世王が犯したとされる五逆の
罪のほうほうが、なお深重でさわり重く感じられ
る。大経の経文どおりの「汝たゞ五逆罪の重
なることをしりて、しかも五逆罪の正法なき
より生ずることをしらず」という暗愚な衆生
としてのわれらにとつての感想には過ぎない
が。まずはこれがなぜ済度されるのか、やや
くわしく見てゆく。

大経、觀經、今昔物語集などもふくめ、教
典に引かれたこの物語を通覧するに、私など
がああ無惨だな、と思つてしまうのは、阿闍
世王が父王を害そうとして飲食を断つ結果、
息子に隠れ母后が子に対する慈母そのもの
ように、觀經などではその身に食べ物塗
りつけさえして、(阿闍世王の説話では「足をけ
づ」られ、善見太子の話では飲食を断られた
うえ着ているものまで剥がされた)無力な夫
である父王に濃やかに飲食を与える光景であ
り、そのことが発覚して、阿闍世が剣を取り、
母の首を斬ろうとする(善見太子の説話では、
母の髪を引いて刀で母を斬ろうとさえする)
光景である。逆罪の深重にして逆罪たるゆえ
んであろう。母を直接に害することははずれ
も耆婆大臣に止められるのだが、父のほうは
みずからの言葉を通して(大経によれば心と
口によつて)確信犯的に殺したといえるので
ある。教行信証の引用では、父王の死後、阿
闍世王の心にただちに悔悟の念が生じたとい
う。身は瘡と臭氣と熱を發し、さまざま薬
を塗つても治らないのは、このような瘡は心
より出るもので、現実のもととなつている四
大(地水火風)より成るものではないからだ
と、阿闍世王は母后に言う(ここでは韋提希
夫人は生きていふことになつてゐる)。自分は
無間地獄に墮ちるであろうという確信と恐怖。
しかるに、懼怖し躊躇しながら耆婆に励ま
され沙羅双樹林をめざす阿闍世王を待ち受け
つつ、まさに悪逆阿闍世一人のために、涅槃
に入ることを、凄まじいことに釈尊は少し先
延ばしさえする。世尊たる自分はまさに仏性

を見ることのできない衆生のために世に住す
るのだ。仏性を見ることが出来るもののため
に、私はついに世に住すること久しいもので
はないのである。そしてその衆生とは罪重い
阿闍世王と名づけられたものにほかならない。
阿闍世王は「無量無辺阿僧祇劫」に涅槃に入
ることができないが、このゆえに、私も阿闍
世王のために無量億劫に涅槃に入らないのだ、
と釈尊は沙羅林に集まつた大衆に説法する。
このことは如来の密語不可思議なのである、
と獅子吼される(これらは途中までやつて来
た阿闍世王や耆婆大臣の耳に届いてゐる)。

物語的には、教行信証にとつて最大のテー
マとも言える悪人正機が大きく正面にせりあ
がつてくる山場であろう。釈尊はこのとき月愛
三昧という瞑想に入り、三昧に入り終わると
同時に大光明をはなつ。その光は阿闍世に届
いて彼のからだを治してしまう。阿闍世の四
大によらずという病を、まず四大より成るそ
の身から治し、それから心に及ぼうというこ
とである。阿闍世王はそう説明する耆婆にむ
かい、如来世尊はこの自分を見たてまつるお
つもりなのか(そんなはずはない)、と言う。
耆婆は答えて、たとえ七人の子があるとし
て、父母にわけへだての心があるはずもない
けれど、一人の子が病氣であつたら、父母の
心はその子においてひとえに重いごとく、大
王よ、如来もまたもろもろの衆生に平等でな
いわけがないけれど、罪者においてその心は
ひとえに重いのです、と申し上げる。これが
衆生世俗への方便の論として、もつとも基本
的な悪人正機説の根柢のひとつというか、そ
れを担保する考えだと言えよう。

さて五逆の罪はどうして済度されるのか。
阿闍世王をまえにおこなわれる釈尊の説法に
よれば、ことは父王にさかのぼつて展開され
る。頻婆娑羅王は生前、諸仏に善根を積み供
養を行つて、そのゆえに王位に居すことを得
たという。いいかえれば諸仏がその供養を受
け入れなかつたとしたら、先王は王たりえな
かつた。もし王たりえなかつたとしたら、阿
闍世王はそもそも頻婆娑羅王を害することは

なかつたわけで、その罪が永劫に消滅しないものだとしたら、諸仏も永劫に恢復されない罪を得ることになる。もし諸仏世尊が本来清浄な姿として罪を得ることのない、そういう存在であつたなら、阿闍世王ひとりどうして永劫消えない罪を得るということがあろうか。たつとかるべき諸仏世尊と悪人阿闍世王の間にも、論理的関係としての縁起・因果は存在するということになる。

さらにたたみかけるように釈尊の説法はつづく。大王頻婆娑羅に、むかしは悪心があつた。毗富羅山に鹿狩りをして曠野を經巡るに、ことごとく得るところがなかつた。その野でひとりの五通具足した仙人と出会つた。大王は、この仙人が鹿をことごとく追ひ払つてしまつたのに相違ないと、瞋恚悪心を發して、左右のものに命じて仙人を殺させた。命終にあつて仙人は怒りを生じ、自分は無辜である、おまえは心と口によつてよこさまにわたしに戮害を加える、わたしは来世においてまた生まれ変わつて、同じように心と口をもつておまえを殺すことになろう、と言う。大王はこれを聞き終つてたちまち悔心を生じて、仙人の屍骸をねんごろに弔つた。このゆえに（このねんごろな弔いによる応報軽きがゆえに）先王は地獄に墮ちることがなかつたのである。このように阿羅漢を戮することも五逆の一であつたはずである。先王はみずから（罪等を）つくつて、果としてみずからその応報を受けたのだ。阿闍世王が自己責任として先王を殺したわけではなく、自分の意思ではどうにもならない業縁あるがゆえに父王を殺したのであつて、そこに実体としての殺罪は構成されない。悪業や罪には罪報という「報」があるというもの。あなたの父王に罪がないとしたら、その身に罪の報があるということがあるろうか。頻婆娑羅王は現世のなかにおいて善果と悪果とを得た。善果とは王位に就いたということであり、悪果とは殺害されたということである。このゆえに先王の位置は不定と言われなければならない。不定なるがゆえにその殺という事実も不定であり、殺不定な

らばどうして決定して地獄に墮ちるといふことが言えるのか。ここでも、ものごとは論理的関係としての縁起・因果空間の中でのみ存在し、ものやことはそれ自体の実体（自性）なるものを持たない、という思想がはたらいている。

この思想は釈尊の考え方にももちろん胚胎していたが、より直接には、ナーガールジュナ（龍樹）によつて大きく完成された空の論理（中觀思想）と呼ばれるものであり、親鸞もまさにそれにほかならない浄土宗の教理の根本をなす考えである。その空の論理は教行信証において阿闍世王の殺罪につき、以下のように展開される。

右に、ものやことは自性なるものを持たないと述べたが、これは阿闍世王の殺罪に関しても言える。教行信証によればこうである。ものごと（原文では涅槃という譬え）は、有るというわけでもなく、かといつて無いというものでもないが、そうはいつてもものごとが心にあるということは「有る」と言つていいのである。殺もまたかくのごとし。殺罪は有るにあらざる無きにあらぬものながら、しかも「有る」と言えるのだが、慙愧のひと（この場合の慙愧とは、自ら恥じ〓慙、また天に恥じる〓愧、という義）には無い（非有）。無慙愧の、烈しい悔いを覚えぬものには殺罪は「有る」とする（非無）。また明らかに報いと思われれることを受けたものには殺罪は「有る」のである。ものごとは本来空と知る（空見）ものに殺罪は存在せず（非有）、ものごとの空なることを知らない（有見）ものには殺罪は存在する（非無有）。ものごとはすべて有であると思ふもの（有々見）には殺罪は「有る」。なぜなら殺罪を有無に渉らぬものの視点から見ずに、有は一向「有る」とするものは、殺罪の報いを得るからである。ものごとのすべては実在すると信ずることのない（無有見）ものには殺罪の報いはない。ものごとはすべて常なるものと見切つたもの（常見）には、殺罪なるものは存在せず（非有）、ものごとは常無きものと見る（無常見）ものには殺罪は

「有る」のである（非無）。ものごとは常なるものと見ることにとらわれているもの（常々見）は殺罪を無きものとするのがかなわな。なぜなら常々見のものには、とらわれた見方という抜きがたい過去世よりの業報（悪業果）がはたらいているからである。これゆえ常々見のものは殺罪を「無し」とすることができない。以上の義をもつてするがゆえに、殺罪は（他のすべてと同じく）、有るにあらざる無きにもあらぬ（非有非無）ものながら、しかもまた「有る」のである。ひとの生死は出で入りの息の有無によつて知ることができ。阿闍世王は殺せと命じたのでなく、その出で入りの息を止めることを心と口によつて命じたに過ぎない。殺とはこのようなことである。諸仏は世俗に従つた方便の言葉として説いて、これを殺と言ふのである。殺（罪）が「有る」とは、こう述べきたつて初めて言えるというものである。この有無のことは、次に引く文章と文中の譬えで読むと分かり易いかもされない。この場合、「有る」とされる殺罪は毛髮の幻覚とされるものであろう。

眼病にかかった人が眼の前にちらつく毛髮を幻覚している。そこでほかの人が、おまえの見ている毛髮は真実ではないと教える。そのとき眼病者は、自分の見ている毛髮はほんとうにあるものではないという限りのことは想像できる。しかし、毛髮の幻覚がまったく見えない、という真実を理解しているわけではない。医薬の力によつて眼病が治ったときに初めて、毛髮の自体をまったく見ない、という仕方で真実を理解する（『明らかなことば』十八章ほか）。その場合には、毛髮を有りとすることを越えているとともに、それを無いとする意識をも越えている。幻覚そのものがないときには、幻覚の有も無も、肯定も否定もないのである。空性とはそういうことである、とナーガールジュナもいつているのである。

（『空の論理（中観）』梶山雄一・文、角川ソフィア文庫「仏教の思想」3、160頁より）

こうして世尊によつて阿闍世の絶対的な罪は相対化された。したがって、悪の絶対性は相対化されたのである。世界を実体本質論的に、すなわち有見の眼で見ればどうにも解きほぐせない結ばれば、非有非無という、一種の数理的なグリッドたる空の論理を通すことによつてほどこることがはるかに予見されている。ただし、罪や悪は相対化され、減らされたのであつて消滅したのではないことは、気がついておいていい。あくまでも、非有非無のなかでいつとき「有る」のである。世尊の説法を聴いて阿闍世は蘇生の思いをいたし、「われいま仏をみたてまつる」と声を上げる。そして、世尊釈迦にむかつて、もしわたしがあきらかによく世の中の衆生の悪心を破ることができなかつたら、阿鼻地獄にあつて無量劫のうちにもろもろの衆生のために深い苦しみを受けようとも苦としない、と言ふ。これは感謝の言葉であるというより、一種の誓願だろう。弥陀の誓願に似た。ここに罪科がいつとき「有る」ということの秘密のようなものが見え隠れしている。そして、阿闍世自身の悪心がこうして「破壊」されたのみならず、阿闍世が今度は衆生の悪心を「破壊」する側に回るといふ展開をつらぬくもの、いいかえれば数理的で犀利なグリッドたる空の論理に満ちているのは、深い憐れみ、寛容としての大悲ということになる。いままで全力を挙げた為されていた罪・悪の相対化、ときに詭弁とも印象されかねない論理操作を支えていたのは、この大悲であつたのだ。

（次号に続く）

confidence

家から歩いて五十歩のところにある乾物屋さんで、スイカほどの大きさのメキシコ産ハネデューメロンを売っていたのでレジまで持っていったら、いつもは無口な店主の長男が、そのハネデューメロンを両手に掲げもち、ゆつくりと振りながら、中が「たゆたうようになったら食べてください」と言った。それは、たゆたう、遠い国からやってきた。(後藤)

二年目の家づくりが迫っている。5月20日ころから大工仕事、畑作業、薪運びなど、なから手をつけていいか分からない作業を開始する。去年作った6畳の小屋に下屋を追加して、土間のリビングとする。そこに薪ストーブを設置して、炊事をする。それから、12畳の作業小屋を作る。ブルーシートで作業小屋を卒業できると楽になるだろうなあ。(木村)

さる1月25日に行なわれた社会福祉土国家試験に合格した。安心した。安心したしばらくは身体がゆるゆるになった。軸がふにやっとなりかけた。受験勉強や結果待ちというのは身体を檻の中に自分で閉じ込めることだと感じた。その折の柱が一本一本身体の中にあるのでそれをはずしたりその間を抜けていく。そうすると檻の向こうにあった世界が現われる。大いに不安である。その不安は同時に自由そのものでもある。自由は楽ではない。そして自由な方がいいかしら? とも感じることもある。(石川)

父がジャージをおろすのが間に合わなくて、パンツの中にうんこをしてしまいました。おしっこを漏らしてしまった時もあり

ました。そう先生に伝えたら、そそうをなくすお薬をくれました。なんでもあるんですね。怖いくらいです。いまのところ効いているみたいです。でも副作用で怒りっぽくなったら飲まないでと言われました。いつも怒りっぽいのでどう判断したらいいのかな。そうだ! てきとーにしておきます。(福島)

河村眞理さんから、「野村さんのことが好きなんです」と言われたとき、僕は23歳でした。河村さんとは、ファンタジーやSF小説について共通の好みが多々あり、話し出すと時間を忘れるほどの相性の良さだったのですが、河村さんからの申し出に對しての僕の答えは、No、でした。そのころ僕には、想いを寄せている女性がおり、片思いだとわかっていても、河村さんからの申し出は、お断りしてしまいました。もしあのとき、河村さんの想いに応えていたら、今の僕はなかつたでしょう。幸せな結婚をしたために、詩を書くこともなく、おそらく猫ではなく犬を飼っていたと思います。少なくとも、今僕が過ごしているような、狂った日々を味わうことだけはなかつたはずです。文学という、呪われた芸術の神々に仕え、言葉を授かる、この甘くもあり、苦くもある悦びを味わうことのできる幸いを得ることを許される身分になれた、そのことに後悔はありません。とは言うものの、河村さんについての「もし」は、6月で42歳になる僕に、強烈な磁力をもつて、のしかかるように迫ってくるのでした。

(野村)

約一年間にわたって書き続けて来た散文

詩の△追憶▽シリーズですが、今回の「追憶Ⅷ」をもってようやく完結を見ること出来ました。この連作を書くにあたって私が意識したことは、事物や概念や時間などに彩色を与えて強く印象付けるようにしたことと、私自身が特に思い入れを持ち、影響を受けたことのある文化人やクリエイターたちの名前をやや強引に作中に登場させるようにしたこと。それらの色彩や人物たちはどれも私自身の原風景を構成する大切な欠片たちであり、その各々には様々な生の痕跡や痛覚などが刻印されているはず。背景の時代は全て職歴とリンクして、百貨店の配送の短期アルバイトをしていた頃のⅧ（79年）が一番早く、次が喫茶店時代のⅦ・Ⅰ・Ⅱ（80年）、続いてナイトクラブのバーテンをしていた頃のⅢ（81年）、設計事務所時代のⅣ（82年）、最後に出版社時代のⅤ・Ⅵ（83〜84年）と続く構成になっています。（秋川）

今回で「が折れた腕や」という詩は完成となる。全部で82行。この詩によってこれまで見えなかった次の詩の地平がみえはじめている、ということは収穫のある作だったと思う。が、再就職という現実のほうはまったくうまくいっていない。働きたい。

（近藤）

三回目です。やはり、この手の書き方に僕自身としては、限界を感じながらの制作となりました。現象が言葉を連れてくる、そこから紡ぎだされていく、目論みは完全に裏切られる、これが僕のスタイルです。現象を言葉にしようとするこのような苦しい羽目に陥るということを、この連作で学びました。しかし、潮時を黙殺しての出品です。もちろん当たり前のことですが、それはあくまでこちらの都合の話です。次回は連作の姿を取らないかもしれません。或いは負け戦を続けるか。

大和川の河原まで十五分、休日ともなれば犬を引き連れて、時間を流しにゆきます。犬ははりきって駆けずり回ります。いつしか僕の不安も霧散しています。陽の傾きを確かめながら帰途につきます。犬は友だちです。かわいいやつです。別に病んでいるわけではないですよ。（高塚）

新年度が始まり、若葉が目にしみる季節は山のものが美味しいので、山に入り、崖つぶちに自生するタラの芽を命がけで採って、天婦羅などやっております。（タケイ）

こういうのを文武両道と呼ぶかどうか。二十年続いているCDを持ち寄って聴く会の友人と、近くの七沢温泉に自転車で寄ってから自宅のオーディオで名曲コンサートと洒落こむことにした。

平日の午前中の野天風呂と言うだけで、すでに天国です。辺りの田圃に水が入り始め、燕が飛んでいる。冬鳥のツグミはまだシベリアへ帰らずにいる。

鳥類譜の作曲家オリビエ・メシアンは、軽井沢でこの夏鳥と冬鳥のハザカイに遭遇して、まるで天国だ！と言ったという、こんな夢みたいなのはパリでは起り得ない。

La Ville d'en hautは、メシアン作曲『天より来りし都』。（和田）

連載と関係したこともかもしれないが、縁起の縁ということを最近よく考える。あらゆる生起は何かの縁によるものであるし、一旦生起した物や事は決して無くならず、また次の生に続いてゆく。人の一生で終われることなど、実はどこにもない。そのことと秘密を業縁という形で発見することもあり、知らないままもがいて終わる一生もある。そこに流れる悲しみと、また同じ字の抜苦の悲ということを考える。（倉田）